秋田県移住者インタビューブック

"秋田暮らし"

はじめました。

秋田県移住者インタビューブック

"秋田暮らし"はじめました。

はじめに

ふるさと回帰のUターン。初めての秋田暮らしのIターン。人々が新たな生活にチャレンジするとき、それぞれの物語があります。

このインタビューブックは、秋田に移住された方々の協力を得て、

1　移住した方々がお互いを知り、

2　秋田への移住を考えている方のみちしるべとなり、

3　地域の方々に新たに住民となった方々をご紹介する

ツールとなることを目指して作成したものです。

この冊子が縁となり、人と人がつながり、秋田暮らしがより豊かになるよう願っています。

INDEX

P03　巻頭座談会
私たち、秋田暮らしはじめました。

・男鹿市　池内 和美さん
・羽後町　松浦 孝行さん
・秋田市　重久 愛さん

P09　先輩移住者に聞いた！ 県北エリア

・case01　能代市　高濱 遼平さん 奈保子さん
P10　・case02　鹿角市　成田 高秀さん いつかさん
P11　・case03　北秋田市　河原木 良太さん
・case04　八峰町　木村 友治さん
P12　・case05　三種町　鎌田 真広さん
・case06　藤里町　小原 拓万さん

P13　先輩移住者に聞いた！ 県央エリア

・case07　由利本荘市　渡辺 嵩さん
P14　・case08　秋田市　菅野 利剛さん
P15　・case09　男鹿市　三浦 豊さん
・case10　潟上市　奈良部 友則さん
P16　・case11　にかほ市　渡邊 健一さん 村上 清香さん
・case12　秋田市　泉谷 奈緒子さん

P17　先輩移住者に聞いた！ 県南エリア

・case13　湯沢市　沼倉 祐亮さん
P18　・case14　大仙市　青柳 友哉さん 有理さん
P19　・case15　横手市　千葉 崇史さん
・case16　仙北市　土屋 和久さん
P20　・case17　美郷町　扇田 泰子さん
・case18　羽後町　渡辺 佐さん

P21　移住サポーターの声
P22　秋田県への移住相談窓口のご案内

このインタビューブックは、2019年9月現在の情報を紹介しています。

巻頭座談会

私たち、"秋田暮らし"はじめました。

**移住したいけれど、実際の生活はどう変わるんだろう？と不安に思う方も多いはず。
そこで、さまざまな経験を持つ先輩移住者３名にそれぞれの移住のきっかけと、
秋田で暮らしてみて感じる“本音”をざっくばらんにお話していただきました。**

北海道▶男鹿市　移住４年目
池内 和美さん

宮城県▶羽後町　移住６年目
松浦 孝行さん

東京都▶秋田市　移住１年目
重久 愛さん

profile
いけうち かずみ◯北海道釧路市出身。札幌市内の企業に勤務し、転勤で2007年に秋田市へ引っ越す。2015年に男鹿市へ移住し、2017年には移住者サポート団体「果工務店」を立ち上げた。

profile
まつうら たかゆき◯秋田県湯沢市出身。大手広告代理店で雑誌編集の仕事を経て独立。2016年、羽後町の地域おこし協力隊に着任。現在は任期を終え「NPO法人みらいの学校」で代表を務める。

profile
しげひさ いつみ◯鹿児島県与論町出身。結婚を機に秋田への移住を決意。2019年４月に秋田市の地域おこし協力隊に着任し「移住コーディネーター」として移住者のサポートを行なっている。

それぞれの“秋田暮らし”がはじまるまで

松浦さん（以下松浦）
ひと口に移住といっても、その理由はポジティブなものもネガティブなものもあると思うんです。池内さんの移住のきっかけは何でした？

池内さん（以下池内）
私は2007年に転勤で北海道から秋田市に引っ越しました。今はさらに男鹿市へ移住しているのでそちらにフォーカスしてお話しますね。まず秋田市に来てみて、思ったよりも田舎ではないなと感じました。だからこそ、もっと田舎で暮らしたいと思って男鹿市への移住を決めたんです。

松浦　自給自足みたいな生活？

池内　完全に、ではないですが。自分たちで作れるものはなるべく作りたいと思いました。だから移住のきっかけとしてはポジティブかな。松浦さんはどうでしょう？

松浦　僕は地域おこし協力隊の着任もありますが、もともと実家の事情で秋田に戻ることを決めたので、気持ちとしては前向きではなかったかも。それもひとつの移住のケースとして伝えたいなと思っています。重久さんは？

重久さん（以下重久）　私は端的に言うと東京で出会った夫の実家が秋田ということで、結婚を機に秋田へ移住することになりました。でも、当初は秋田の知識もほとんどなかったので自分が秋田に住むイメージが全く湧かなかったんです。結婚が決まってから自分で情

撮影・座談会会場/VISCUM

報収集をしたり、実際に秋田に来て移住のイベントに参加したりして、徐々に移住へのイメージを膨らませていきました。

「ここでもやっていける」と確信した移住の決め手

松浦　その後、重久さんが移住を決心した決め手があったんですか？

重久　はい。移住前に実際に秋田に来て地元の方と話す機会を多く持ちました。その中でお話した秋田の女性たちは、みんな活き活きして、輝いて見えたんです。秋田の女性たちのはつらつとした姿を見て、「ここでもやっていける」と確信しました。

池内　地元の方の人の良さに惹かれる気持ち、よくわかります。私は男鹿市に移住して間もなく、車を持っていなかったので職場まで片道30分の道のりを徒歩で通勤していました。でも地元の方にとって見慣れない私が道を歩いていると、みんな珍しがって声をかけてくれるんです。それをきっかけに仲良くなった方もたくさんいますし、時には車で職場まで送ってくださる方もいました。基本的に年配の方が多いので、娘や孫のように面倒をみてくれるんです。私も地元では比較的田舎に住んでいましたが、人の温かさは秋田ならではだと思います。

松浦　それは僕も感じますね。僕は現在2拠点で活動していますが、「外から来た」という理由で移住者を排除するような人はいないかも。地方に移住すると、町内会とか消防団とかお祭りとか、地域とつながる機会が多いんです。無理のない範囲でその機会を活用すれば案外すぐに地域に溶け込むことができると思います。さて、池内さんも何か移住の決め手になるような出来事はありましたか？

池内　私の決め手は「家」ですね。男鹿への移住を決め、物件探しをしていたときに出会った建物に今も住んでいます。

重久　住んでいる家は古民家なんですか？

池内　古民家ではなく、昔診療所だった物件なんですよ。とても古い建物で、部屋や廊下に家具や生活用品が置かれたままでしたが、片づけながら今もそのまま使っています。洋館風のレトロな雰囲気に一目惚れだったんです。入居の条件も良く、移住の不安も吹き飛びました。猫を飼っているので、猫と一緒に住めるというのも有り難かったですね（笑）。

移住後の暮らしの変化、気持ちの変化

池内　松浦さんは2拠点で活動しているんですか？

松浦　滞在している日数は秋田のほうが多いですが、羽後町と仙台市で活動しています。単身赴任のようなものですが、本籍が仙台市にあるので、家族はそちらで暮らしています。秋田に戻ってすぐは地元の友人に「どうして戻ってきたの？」と驚かれました。

秋田を出た人が地元に戻るとネガティブに捉えられることが多いんですよ。

重久　私は長く東京で暮らしていましたが、都会ではあまり無い感覚ですね。なんだかもったいないように感じます。

松浦　そうですね。周囲の人の意識や仕事の面で、秋田に帰りたいと思っている人が、もう少し帰って来やすい環境を整えるのも僕らの仕事かな、と。地域おこし協力隊に着任したのも、県外で得た経験や知識を秋田に還元しながら、地方の課題を解決したいと思ってのことでした。お二人の生活は移住後どう変わりました？

重久　東京での暮らしは毎日が忙しく、寝る間も無いような状況でした。秋田に来て、収入面などで東京での生活に及ばない部分もありますが、自分の体調やメンタルの変化に気づく余裕ができたことが大きな変化です。

池内　私も移住前より気持ちに余裕を持って生活できています。男鹿市の中でもとくに人口の少ない集落に住んでいるので、お金を使う機会がぐっと減りましたね。そのぶん地域の人たちと支え合いながら暮らしています。また、昔ながらの手仕事を体験したり、移住体験ツアーを企画したりする「果工務店」という団体を2017年から主宰しています。県内外を問わず多くの人と関わるようになったという点で、移住後の大きな変化だと思います。

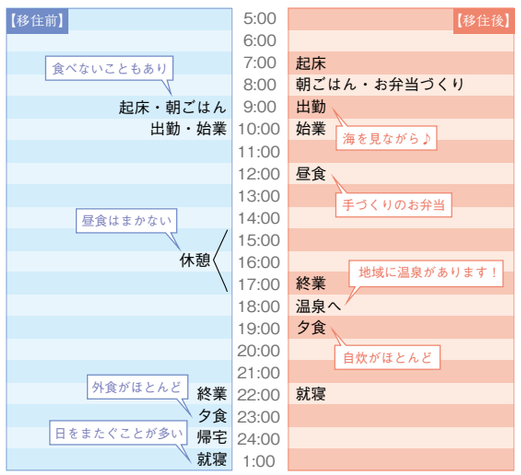
2019年2月に果工務店が企画した移住体験ツアーの様子。参加者は味噌作りなどの手仕事を通して秋田の魅力を体験した。

松浦　なるほど。一緒に体験することって、とても大事ですよね。先ほど金銭面のお話が出ましたが、もう少し踏み込んでお聞きしてもいいですか？

重久　私は秋田市に住んでいるので、買い物で困ることはほとんどありません。なので支出については移住前とあまり変わらないですね。今は車を持っていないので、車を持つようになれば維持費もかかり、行動範囲も広がるので自然と増えてくるのかな、というイメージです。収入は、地域おこし協力隊としての報償費と、秋田市でヨガの教室を開いているので、その講師料とがありますが、移住前と比較すると減っているのは確かです。首都圏や、実家がある鹿児島県へのアクセスもあまり良いとは言えず、不便に感じる点もあります。でも収入の面や不便さを

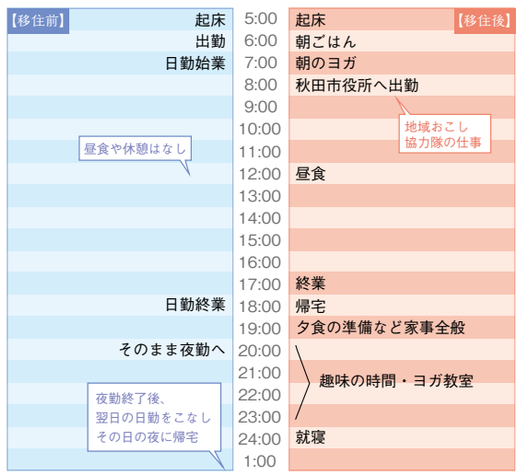
移住前・移住後の生活サイクルの変化

〈池内さんの場合〉



池内　秋田市の飲食店に勤務していたころと、現在の比較です。外食が多かったのが、ほぼ自炊になり、食生活も変わりましたね。

〈重久さんの場合〉



重久　東京での生活を振り返ると壮絶だったな…という印象です。秋田に来てからは、健康的でゆとりのある生活ができています。

カバーできるだけの気持ちの余裕や、人とのつながりを持てていることが、とてもうれしいですね。

移住者として移住者を支える、そして地域を支える、ということ

重久　先程不便さをカバーしてくれる人とのつながりについてお話しましたが、仕事についても同様です。私は秋田市の地域おこし協力隊に着任し「移住コーディネーター」として移住を検討している方や、すでに移住された方のサポートを行っています。

松浦　まさに人とつながるお仕事ですね。

重久　そうなんです。新しく来た移住者さん同士が交流するイベントの企画も行っているのですが、交流会で出会った人たちが回を重ねるごとに仲良くなって、それぞれが次第に地域に根を張っていく姿をみていると、とてもやりがいを感じます。一方で、移住を検討している方の相談を受ける場合には、移住自体を美化しないように気をつけています。もちろん、私が感じた秋田の良いところもたくさん伝えていますが、実際に暮らしてみて気づいたこと、困ったことなど、皆さんの生活に関わるポイントはとくに注意して伝えるようにしています。

重久さんが移住コーディネーターとして東京で参加した、移住を希望する方たちのための交流会の様子。幅広い世代が参加している。

松浦　不便なことや困ったことがあるっていうのは、それだけ地域に課題がある、という見方もできると思います。僕は今年地域おこし協力隊の任期を終え、羽後町を拠点に「みらいの学校」というNPO法人を立ち上げました。羽後町の子どもたちが将来の選択肢を広げられるよう、小中学校を中心に多彩な人材を派遣し、講演を行っています。子どもたちの可能性が広がることで、地域の可能性も広がり、将来の課題解決につながると思うんです。今はまだ小さな単位ですが、将来的には県内外でニーズのある自治体・教育機関にサービスを提供することが目標です。そのための人材や、学生インターンシップの受け入れも行っています。活動をお金に変えて地域に還元するためにはまだまだ時間がかかりますが、将来を見据えた長期的な活動が大切だと思って取り組んでいます。

“秋田暮らし”のその先にあるものとは…?

松浦　秋田県の移住相談窓口への相談件数は年々増えているみたいですね。

重久　私もイベントを企画していて、こんなにいるのか、と思ったことがあります。皆さん色々な事情や理由を持って移住されていますが、私を含めそれぞれが大きな決断をしていらっしゃっていると思うので少しでも秋田での暮らしを魅力的に感じてもらえたらと思います。そのためには定住できる環境づくりが大事ですよね。地に足をつけて、目的や目標はある程度固めておいたほうが安心ですし、具体的な相談もしやすいと思います。今は首都圏でも移住のイベントが開催されたり、相談窓口で話を聞いたりできるので、移住後の生活をイメージしやすくなっていると思います。もちろん移住後のサポートも充実しています。

松浦　インターネットが普及した今では、僕みたいに複数拠点で活動することもできますしね。まずは旅行でもいいので秋田を見に来てもらいたいな。

池内　最低でも一泊はしたほうがいいですね。季節の変化がとてもはっきりしているので、風景や生活のスタイル、旬の食べ物の変化をぜひ感じて欲しいですね。地域によっても気候や文化が大きく変わるのも面白いところ。実は私が住んでいる男鹿市には、近年移住者も含めてさまざまな分野でおもしろい活動をしている人たちが集まってきているんです。男鹿という地域はもともと集落ごとの交流があまり無かったのですが、個々の活動によってその垣根がいい意味で取り払われつつあります。私は移住者だからこそできる地域との向き合い方で、もっと秋田を盛り上げたいんです。

松浦　面白い活動をしている人が増えている、という点では秋田県全体の傾向にも当てはまりますね。古民家を活用したカフェやゲストハウスが増えていたり、道の駅や温泉施設が地域の新しい交流拠点になったり。地元の人も「面白いこと」を面白がってくれる人が世代を問わず増えたように感じます。そういう意味では男鹿のナマハゲや秋田犬で秋田県への注目が高まっている今だからこそ、ブームで終わらせたくないという気持ちは大きいですね。ブームが起きたらその次はムーブ。ムーブメントとして継続的に発信していくことがこれからの秋田をもっと面白くできるんじゃないかな。僕ら３人の活動は内容こそ違いますが、地域の課題を解決し、情報を発信し、盛り上げていく、という点で共通していると思います。秋田ならではのビジネスの可能性も広がっているし、新しいビジネスに挑戦する人や企業も増えています。自分の経験やノウハウが思いがけない形で周囲と化学反応を起こし、新たな「面白いこと」が生まれるきっかけになっているんです。今後は新しく人がやってくることをみんなで楽しむことができる、そんな地域づくりを目指していきたいと思います。

松浦さんが代表を務めるNPO法人みらいの学校の事業のひとつ「しごとーいうご」の様子。参加者は、遊びを通して働くことを体験した。

先輩移住者に聞いた！

県北エリア

世界遺産の白神山地や十和田湖、八幡平があり自然環境に恵まれています。県内でも比較的気温が低く積雪も多いエリアです。養豚や名物である比内地鶏の養鶏など畜産が盛んで、きりたんぽ鍋、秋田犬といった秋田らしいコンテンツが盛りだくさんの地域です。

写真左：たかはま りょうへい／栃木県出身。商品開発・製造を担当。
同右：たかはま なおこ／能代市出身。「木能実」の代表を務める。

case 01

神奈川県▶能代市　移住3年目

高濱 遼平さん・奈保子さん

木都・能代を「木の実」で盛り上げたい！

能代市でドライフルーツやナッツを販売する「木能実（きのみ）」を運営する高濱遼平さん、奈保子さん夫妻。学生時代に宮城県で出会った２人は、神奈川県小田原市で2011年に「木能実」の前身となる店舗をオープン。その後店舗移転の話が出たタイミングで奈保子さんの実家である能代市への移住を検討し始めたといいます。

「妻の実家の敷地内に店舗を建てました。移転の準備で1年半ほどかかりましたが、妻の家族の協力もあり、とてもスムーズに進みました。今は秋田の農産物を中心に加工していますが、その可能性や魅力に日々気づかされています。今後も地元の方に喜ばれる商品を作り、能代を盛り上げたいですね」。（遼平さん）

移住のポイント

事前に能代のイベントに参加してお客さんの反応を見たり、県庁や市役所、商工会議所などの相談窓口も活用したりして、開店の準備を進めました。

case 02

埼玉県▶鹿角市　移住1年目

成田 高秀さん・いつかさん

草木染と糸紡ぎで、鹿角に残る伝統と地域の人の思いを紡ぎたい。

2018年の12月、鹿角市へ移住した成田高秀さん、いつかさん夫妻。出身も勤務地も違う２人が出会ったのは沖縄県の宮古島。草木染のワークショップをきっかけに親交を深め、結婚を機に染め物と糸紡ぎが２人のライフワークになりました。当時住んでいた埼玉県から、より自然豊かな場所で仕事ができるよう、移住を検討するようになりました。

「夫の祖父が住んでいた関係で鹿角市を訪れたとき、この豊かな自然の中で草木染や糸紡ぎができたらいいなと思いました。しかし、夫の両親や周囲の友人に反対されたんです。確かに、深い雪や冬の寒さに慣れていない私たちにとって、とても厳しい環境だったと思います。だからこそ移住前に何度も鹿角市を訪れ、２年かけて移住の準備をしました。その甲斐あって、今では周囲が応援してくれています。現在は、鹿角紫紺染（しこんぞめ）・茜染（あかねぞめ）研究会に所属し、伝統文化の継承と自分たちの工房の活動に取り組んでいます。厳しい自然の中で鹿角の人々が培ってきた文化や想いを廃れさせることなく、その魅力を地元の方に伝えられたらと思っています」。（いつかさん）

移住のポイント

鹿角市は秋田県のなかでも冬は雪深く、寒い地域。事前の下見や準備を怠ると大変です。実際に数日宿泊して、体験してみると安心ですね。

写真左：なりた たかひで／秋田市出身。国内外の染色の文化を研究している。
同右：なりた いつか／東京都出身。フリーの写真家兼デザイナー。

成田さん夫妻の企画による、秋田県内で生産されているコットンを使った綿紡ぎのワークショップの様子。県内の生産者と連携し活動を行っている。

かわらぎ りょうた／千葉県出身。現在入社2年目。北海道で出会ったジビエ料理に感銘を受け、猟師を目指すようになる。

case 03

千葉県▶北秋田市　移住2年目

河原木 良太さん

夢の「猟師」を目指して秋田への移住を決意！

千葉県出身で北秋田市の山一林業株式会社に勤める河原木良太さん。自然が大好きで、将来の目標は「猟師」になること。千葉県内の大学を卒業後、マタギ文化のある秋田に移住しました。

「仕事で林業に携わりながら狩猟をする人も多いと聞き、Aターンサポートセンターや北秋田市役所のサポートを受け、林業会社への就職を目指しました。今では生活にも慣れ、狩猟免許の取得に向けて奮闘しています！」。

移住のポイント

入社前、事前に秋田での研修があり、専門の機械を扱う資格を取得できました。入社後、スムーズに現場作業に入ることができたのは、とてもありがたいですね。

きむら ともはる／宮城県出身。長年農業に従事し、現在はNPO法人ミチのクニ手這坂（http://tehaizaka.com）の代表を務める。

case 04

宮城県▶八峰町　移住8年目

木村 友治さん

築170年の古民家で豊かな農村の暮らしを満喫！

「秋田の桃源郷」として知られる、八峰町手這坂集落。日本の原風景を残すこの場所で、農業を営む木村友治さん。20代のときに農業の研修を受けた後、青年海外協力隊の農業指導員としてパラグアイに渡りました。

「2011年に帰国し、日本でも農業を続けようと、農地を探しました。昔ながらの景色が残るこの地の魅力が移住の決め手になりましたね。今後はワークショップなどを通じて、八峰町の可能性を模索していきたいです」。

移住のポイント

数年前、手這坂の景観を維持するためのNPO法人を立ち上げました。今住んでいる古民家を活用し、近々ゲストハウスをオープンさせる予定です。

case 05

新潟県▶三種町　移住4年目

鎌田 真広さん

クアオルトの推進で町民の健康増進に貢献したい。

クアオルト健康ウオーキングとは、豊かな自然の中で無理なく運動する健康法です。三種町でこの取り組みを推進する鎌田真広さんは2016年、地域おこし協力隊に着任しました。「環境保全の技術を学ぶため、新潟県の専門学校に通っていたとき、三種町でクアオルトを推進する協力隊の募集を目にしました。まさに自分のやりたいことと感じ、迷わず応募。任期を終えた現在も高齢化の進む三種町で、町民の健康増進を目標に活動しています」。

移住のポイント

海が近く自然も豊かな三種町ならではの活動だと感じています。自治体と町民が一体となってクアオルトに取り組むことで、町全体を元気にしたいです。

かまだ まさひろ／秋田市出身。新潟県の日本自然環境学校で、環境教育を学ぶ。現在「一般社団法人ヘルケアデザイン秋田」に所属している。

こはら たくま／兵庫県出身。大手家電メーカーの営業職を経て藤里町の地域おこし協力隊に着任。藤里町のPR事業を手掛けている。

case 06

兵庫県▶藤里町　移住3年目

小原 拓万さん

自身のスキルアップを目指し町おこしに挑戦しています。

藤里町で地域おこし協力隊として活動する小原拓万さん。3年前に協力隊に応募し、藤里町へやって来ました。

「地元では大手企業の営業をしていました。30代になり、自分をスキルアップさせたいと考え、地域おこし協力隊になろうと決めました。日本のなかでも著しく過疎化の進む藤里町で自分がどこまでできるか試してみたいと思ったんです。スキルアップという意味では非常に面白い環境で仕事も充実しています」。

移住のポイント

着任して間もないころは自分のイメージとのギャップに戸惑いました。しかし、地元の方と真摯に向き合うことでより良い関係を築くことができるようになりました。

先輩移住者に聞いた！

県央エリア

県庁所在地の秋田市があり、比較的交通の便が良く、積雪もほかの地域に比べると少ないエリアです。男鹿半島や鳥海山など豊かな自然に囲まれる一方で、県のリーディング産業である電子デバイス産業の集積地があるなど、多様性に富んだエリアです。

わたなべ たかし／由利本荘市出身。現在由利本荘市内で「炭火の居酒屋 マナイタ」を経営。地場産の食材を使った料理を提供している。

case 07

東京都▶由利本荘市　移住2年目

渡邊 嵩（たかし）さん

地場産の食材の力で、もっと地元を盛り上げたい！

由利本荘市出身の渡邊嵩さんは、東京都内の大学を卒業後、飲食店経営を目指し、東京で修行を積みました。

「久しぶりに地元に帰ったとき、飲食店の少なさや元気の無さに驚きました。そこで、食の力で秋田に少しでもいい流れを作ることができればと思い、地元に戻って店を持つことにしたんです。周囲に心配もかけましたが、今やらないと後悔する気がして、開店まで夢中で準備を進めました。開店にあたり県の起業支援事業による助成制度を活用しましたが、商工会や市役所などが相談に乗ってくれて、心強かったですね。地域の方に"あってよかった"と思ってもらえるような料理や空間を提供し、地元を盛り上げていきたいと思います」。

移住のポイント

秋田の食材は季節をより強く感じられるのが魅力。地元の方でも意外に秋田の特産品を知らない方が多いので、食材の魅力を伝えていきたいですね。

case 08

岩手県▶秋田市　移住4年目

菅野 利剛（としたか）さん

引き継いだ事業を一番応援してくれたのは、地域のお客さんでした。

秋田市保戸野で約30年続く店「美豆木コーヒー」。現在のオーナー・菅野利剛さんは、2015年に先代のオーナーからお店を引き継ぎました。菅野さんは岩手県北上市出身。高校卒業後に埼玉県の大学へ進学し、東京都内の企業に就職しました。昔からパン作りが好きで、いつか自分のパン屋さんを開きたいと考えていたそうです。

「インターネットで物件を探してこの店を見つけました。そこに『後継者募集』という案内もあって興味が湧いたんです。すぐに連絡して先代のオーナーに会い、この店を引き継ごうと決意しました」と菅野さん。事業の引き継ぎについては秋田県事業引継ぎ支援センターのサポートを受けて進めたといいます。

「先代オーナーからの要望は『美豆木の豆を引き継ぐこと』。私にはコーヒー豆の焙煎の経験はもちろんなく、初めは馴染みのお客さんの厳しい声と向き合うことから始まりました。このままの味ならもう買いにこない、といわれたこともありました。でも、アドバイスをくれて応援してくれたのも、常連のお客さんでした。店舗や設備に加え、お客さんも引き継げたことが一番嬉しい」と事業引き継ぎならではのメリットを教えてくれました。

移住のポイント

人に雇われて辛い思いをするのではなく、自分の判断で仕事をすることができるのでとても充実しています。思い切って移住して、お店を持って良かった！

お店の前で通りを眺めながらお話する菅野さん。「この場所は、昔から住んでいる住民の方が多いです。わりと高齢の方も多くて、落ち着いたお客様が多いのが特徴ですね」と教えてくれた。

かんの としたか／岩手県出身。共に店を営む奥様の出身が秋田県だったこともあり移住に抵抗はなかったそう。現在は秋田市内でパンの出張販売も行っている。

みうら ゆたか／男鹿市出身。「ゲストハウス男鹿」では宿泊のほか、釣りやカヌー、SUPなどのマリンアクティビティーを楽しむことができる。

case 09

東京都▶秋田市▶男鹿市　移住8年目

三浦 豊さん

海を望むゲストハウスを秋田のマリンスポーツの拠点に。

男鹿市で「ゲストハウス男鹿」を営む家具職人の三浦豊さん。「30歳を過ぎ、東京から地元秋田へ戻り独学で一から家具作りを学びました。作品を増やすうちに家具を展示する店を持ちたいという思いから、男鹿市の空き家を購入。5年かけてリノベーションしましたが、海の目の前という立地を活かし、マリンスポーツが楽しめるゲストハウスとして開業することにしました。地元の人にこそ男鹿の海の魅力を知ってもらいたいですね」。

移住のポイント

趣味のマリンスポーツや、本業の家具職人としてのスキルを活かし、秋田の海の楽しさや自然の美しさを発信しています。

いずみや なおこ／静岡県出身。静岡県内の大学を卒業後、東京都内の保険会社に勤務。2018年秋に秋田市在住の男性との結婚を機に移住。

case 11

東京都▶秋田市　移住2年目

泉谷 奈緒子さん

東京での移住イベントに参加し秋田暮らしの知識を深める。

静岡県出身の泉谷奈緒子さんは、秋田市の男性との結婚を機に移住しました。「知らない場所での暮らしが不安で、東京で開催された移住のイベントに積極的に参加しました。秋田の人たちから秋田での暮らしについて話を聞くうちに不安が和らぎました」と当時を振り返ります。

現在は秋田市の保険会社で働く泉谷さん。「東京にいたころより早く帰宅できるので、家族と過ごす時間を多く持てるのが良いです」と秋田での生活を楽しんでいます。

移住のポイント

最初は電話で秋田の人の言葉を聞き取ることができず大変でした。周りの人のフォローも受けながら、今は少しずつ慣れてきました。

ならぶ とものり／栃木県出身。潟上市にある洋菓子メーカー「メロニーハウス」に勤務し、現在は店舗メニューやお土産品の開発を手がける。

case 10

栃木県▶潟上市　移住3年目

奈良部 友則さん

地場産品を使ったスイーツで将来は自分の店を持ちたい！

潟上市の洋菓子メーカーでパティシエとして働く奈良部友則さんは、現在移住3年目。栃木県出身で、移住前は地元の洋菓子メーカーに勤めていました。

「地元の栃木で結婚し、30代半ばになって自分のお店を持ちたいと考えたときに、妻の実家のある潟上市での起業を考えました。秋田に来て3年、今は地元の洋菓子メーカーに勤めていますが、将来は地場産の食材を使ったメニューで独立するのが夢ですね」。

移住のポイント

秋田に来て、食材のおいしさに感動しました。地元栃木には海が無いので、海がきれいで四季の変化も楽しめる秋田は、住んでいて飽きません。

case 12

東京都▶にかほ市　移住3年目

渡邊 健一さん
村上 清香さん

秋田の食の可能性で「nikaho」を全国に発信したい。

にかほ市のフレンチレストラン「Remède nikaho（レメデ ニカホ）」でシェフを務める渡邊健一さんと、サービス担当兼ワインソムリエの村上清香さん。ふたりはともに秋田県出身ですが、就職先の東京で出会いました。

「オーナー企業からのお誘いもあり、店舗として利用している建物と、にかほ市の風土や景色に惹かれ、移住しました。この場所に未来への可能性を感じながら仕事ができることに、誇りと喜びを感じます」。

移住のポイント

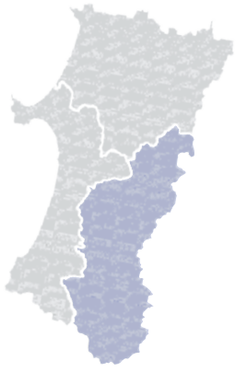
この地には、未来への可能性を感じる文化や食がたくさんあるんです。その魅力を全国、世界に発信できるよう日々切磋琢磨しています。

写真左：わたなべ けんいち／潟上市出身。東京・フランスで研鑽を積んだシェフ。
同右：むらかみ きよか／秋田市出身。日本ソムリエ協会認定のワインソムリエ。

先輩移住者に聞いた！

県南エリア

稲作が盛んな全国有数の穀倉地帯で、酒蔵も多いエリア。全国的にも有名な大曲の花火や、角館、田沢湖など、風光明媚な観光スポットが多く集まる地域です。県内でも有数の豪雪地帯で、積雪が２メートル以上になるところもあり、「かまくら」などの冬の小正月行事も盛んです。



ぬまくら ゆうすけ／湯沢市出身。有限会社ぬまくらの別ブランドとなる「ICHINO SAI」を学生時代に立ち上げ、現在も営業に携わっている。

case 13

東京都▶湯沢市　移住５年目

沼倉 佑亮さん

秋田と東京の価値観をつなぎ、地元産業を盛り上げたい。

有限会社ぬまくらは湯沢市に本社を置き、首都圏のクライアントの依頼を数多く手掛ける印刷会社。現社長の長男である沼倉佑亮さんは、子どものころから秋田と東京を行き来しながら家族の仕事を間近で見て育ちました。

「現在も２拠点で仕事をしています。クライアントが持つプリントの知見と、実際の生産現場の技術とのギャップは大きく開いてしまうもの。その仲立ちとなって、商品企画から製造までを一手に担う事業を学生時代に立ち上げました。首都圏での仕事の水準を維持しながら、地元企業としての役割も果たす。秋田を拠点にしているからこそできるビジネスのあり方で、今後も地域の課題解決に取り組んでいきたいと思います」。

移住のポイント

休日は温泉や景勝地をめぐり、疲れをリセットしています。東京にいるときよりも雑念に囚われず、考えを整理できるのも秋田ならではですね。

case 14

東京都▶大仙市　移住２年目

青柳 友哉さん・有理さん

大好きな花火のあるまちで、地域の課題解決に取り組んでいます。

豊かな自然に囲まれた集落の大きな一軒家に住む青柳友哉さん、有理さん夫妻は、２年前に東京都から「花火のまち」として知られる大仙市へ移住しました。

「僕は花火好き、妻は旅行好きということで、花火と観光を組み合わせた仕事を夫婦で始めることにしました。どこで起業するかについて、妻の実家の東京や、花火で有名ないくつかの自治体を比較検討し、最終的に『大曲の花火』がある大仙市に決めました。僕自身、全国に数ある花火大会のなかでも『大曲の花火』に一番強い思い入れがあり、自分たちが持つ IT や観光の知識を地域の課題解決に活かすイメージを持てたことが移住の決め手です。移住１年目は便利な町中に住んでいましたが、２年目には、もっと田舎に住もうという妻の提案を受けて、自然がより豊かな郊外に引っ越しました。民泊運営や、花火に関連した観光案内に加え、最近ではまちづくり関連の仕事にも声をかけてもらえるようになり、事業の幅が広がってきました。自分たちの将来や、未来の子どもたちのため、大好きな花火大会を守っていくため、より良いまちづくりに貢献したいですね」。（友哉さん）

移住のポイント

今後は「大曲の花火」当日に宿泊できる場所を今より大幅に増やすために、大仙市内で増加している空き家を、民泊ビジネスに活用していきます。

写真右：あおやぎ ともや／岩手県出身。株式会社ヘバナの代表を務める。
同左：あおやぎ ゆり／東京都出身。趣味の海外旅行で訪ねた国は約40か国。

第一子のはなちゃんは昨年の秋に誕生。広い一軒家で騒音などを気にすることなく、のびのびと育てられている。

ちば たかし／茨城県出身。長らく関西圏で過ごした後、横手市増田町でりんごやさくらんぼなどの果実の生産を中心に、2年半前に就農した。

case 15

茨城県▶横手市　移住3年目

千葉 崇史さん

地域の先輩農家に支えられ、秋田で農業をスタート！

学生、社会人と長らく関西圏で過ごし、40歳を過ぎたころ「何かを作り出す仕事がしたい」と秋田で農業に取り組む決意をした千葉崇史さん。移住3年目となる現在は、横手市増田町で農業を営んでいます。

「全国で就農できる場所を探していましたが、秋田県での農業研修の受け入れをきっかけに移住を決めました。地域の先輩農家の皆さんの指導を受け、今後生産量を伸ばし、しっかりと自立していきたいと思います」。

移住のポイント

秋田県の就農に係る支援制度は全国トップクラスの手厚さ！　相談窓口の担当者や受け入れ農家の方の対応も温かく、移住の決め手になりました。

つちや かずひさ／静岡県出身。現在はローカルラジオ番組のパーソナリティーや、イベントの司会、仙北市の伝統野菜の生産者などとして幅広く活動中。

case 16

神奈川県▶仙北市　移住10年目

土屋 和久さん

仙北市や移住の魅力を地元に向けて発信しています！

仙北市で地域振興に取り組んでいる土屋和久さんは、東京から奥様の地元である仙北市に移住しました。

「東京での職場環境が悪くなり、精神的にもうだめだと思った時、妻の実家の仙北市にある田沢湖を思い出しました。僕が妻を説得して仙北市に移住し、今年で10年目になります。現在は東日本大震災の影響で一時客足の途絶えた田沢湖に賑わいを取り戻すため、仙北市を中心に、農業ツアーやラジオでの情報発信を続けています」。

移住のポイント

青く美しい田沢湖を眺めては日々の活力をもらっています。現在は、秋田に移住してきた方のサポートも精力的に行っていますよ！

おおぎだ やすこ／大館市出身。高校卒業後、チェコ共和国で音楽を学び現地のオーケストラで活躍。帰国後は東京を経て、結婚を機に2016年に帰秋。

case 17

東京都▶美郷町　移住3年目

扇田 泰子さん

クラシックに触れる文化を提供したい。

海外のオーケストラでトランペッターの経験がある扇田泰子さん。美郷町で2019年1月、音楽事務所を立ち上げました。トランペットの演奏活動や指導のほか、県内外で演奏家を招いたリサイタルを開催しています。

「秋田ではすぐ名前を覚えてもらえるので、とても仕事がしやすいです。地元の人がクラシック音楽に触れられる機会は少ないと思うので、音楽を通して秋田の人に刺激を与えられる存在になりたいです」。

移住のポイント

移住後、娘のゆりえを出産しました。秋田は県や町の子育て支援制度も手厚く、周囲のサポートもあり、安心して子育てができる環境です。

わたなべ たすく／長野県出身。羽後町の地域おこし協力隊として3年間活躍。任期終了後も羽後町でバーテンダーとして働く。

case 18

神奈川県▶羽後町　移住4年目

渡辺 佐（たすく）さん

協力隊をきっかけに羽後町の魅力を感じる暮らし。

羽後町の地域おこし協力隊として活動していた渡辺佐さん。イベントを企画する仕事などを通じて、地元の長野よりも秋田の知り合いが多くなったそうです。

「秋田には、都会にないものが全部あります。例えば古い建物でも、自分がどんな視点で見るかで見え方が全く変わることに気づきました」と魅力を語る渡辺さん。任期を満了した今も羽後町で暮らし、お酒が好きなことを活かしてバーテンダーとして働いています。

移住のポイント

人付き合いの関係性が濃すぎると感じることもありますが、一度深く関わりを持つと、いつまでも気にかけて支えてくれる良さがあります。

頼りになる存在！
移住サポーター に聞きました。

これまで、さまざまな方が秋田県を移住先として選んできました。その中で、自身も移住者でありながら、多くの移住希望者との接点を持ち、さまざまなサポートをしてきた一般社団法人ドチャベンジャーズの事務局長・秋元悠史さんにお話を伺いました。

「起業家だけじゃなく、今後はアーティストや研究者なども五城目に移住してもらえたら。次の展開を考えているところです」と語る秋元さん。

ここに来てもらって話して、やれることを一緒に探したい

島根県海士町を経て、秋田県五城目町へ移住した秋元悠史さんは、一般社団法人ドチャベンジャーズの事務局長を務めています。2017年３月に任意団体として発足、同年11月に法人化したドチャベンジャーズは、五城目町地域活性化支援センター「BABAME BASE」の指定管理者となっており、五城目への移住を検討する方の受け皿となっています。

「BABAME BASE には移住を検討している方が多く訪れます。そういった方たちと直接会ってお話をすることがサポート業務としては一番多いかもしれません。形になる前の事業の起業を支援することも多いのですが、それはすでに五城目には多くの起業家が存在していて、彼らの経験を根拠にしたサポートができるようになったことが大きな要因だと思います」。

ドチャベンジャーズは、起業を検討している人への支援だけでなく、仕事や暮らしの体験機会の創出や、移住希望者の発掘、移住を検討する機会の創出事業なども行っています。

また、BABAME BASE は、インキュベーションオフィスとしての側面も。「入居している複数の企業が力を合わせれば、できることは大いに広がります。興味のある方は、まずはご訪問ください。そして一緒にお話しましょう。会話の中で生まれたことを面白いと思ってもらえる方を積極的にサポートしていきたいと考えています」。

2017年度の秋田県事業として行われた東京でのワークショップの様子。一般社団法人ドチャベンジャーズが企画・運営を行った。

こちらも2017年度の秋田県事業で行われた五城目町での現地交流会の様子。地元の方との密な交流が行われた。

秋田県への移住相談窓口のご案内

いざ、移住を検討するようになったとき「さて、どこに相談したら良いの？」と思うはず。県や関係団体では、移住に関する相談窓口を用意しています。まずはご連絡ください！移住をお考えの皆さんのニーズに応じた情報提供をさせていただきます。

首都圏で相談するなら

幅広い移住相談に対応

あきたで暮らそう！Aターンサポートセンター

相談日　火曜～日曜（祝日及びお盆・年末年始期間除く）
相談時間　10:00～18:00
場所　東京都千代田区有楽町2-10-1東京交通会館8F NPO法人ふるさと回帰支援センター内
アクセス　JR有楽町駅〈京橋口・中央口（銀座側）〉下車 東京メトロ有楽町駅〈地下直結〉
連絡先　☎080-9292-5195（相談員直通） E-mail　akita1@furusatokaiki.net

秋田の企業とマッチング！

Aターンプラザ秋田（無料職業紹介所）

相談日　月曜～金曜（祝日及び年末年始期間除く）
相談時間　9:00～17:45
場所　東京都千代田区平河町2-6-3 都道府県会館7F（秋田県東京事務所内）
アクセス　東京メトロ　永田町駅（地下直結）
連絡先　0120-122-255　FAX 03-5212-9116 E-mail　a-plaza@mail2.pref.akita.jp

秋田で相談するなら

移住定住相談窓口

NPO法人秋田移住定住総合支援センター

相談日　月曜～金曜（祝日及び年末年始期間除く）
相談時間　9:00～17:00
場所　秋田市御所野地蔵田3-1-1 秋田テルサ1F
連絡先　☎018-893-3981　FAX 018-893-3982 E-mail　yokoso@a-iju.jp

Aターン就職支援・相談窓口

公益財団法人　秋田県ふるさと定住機構

相談日　月曜～金曜（祝日及び年末年始期間除く）
相談時間　9:00～17:00
場所　秋田市御所野地蔵田3-1-1 秋田テルサ3F
連絡先　☎018-826-1731　FAX 018-826-1732 E-mail　info@furusato-teiju.jp

ほかにはこんなサポートも！

移住定住登録制度

ご登録いただくと、継続的なサポートを受けられます。
1. 移住ニーズに合わせた情報を個別にお届けします。
2. 支援メニューや移住相談会などの情報をお届けします。
3. 移住後の暮らしに関する相談にも対応。

右記または県移住・定住総合ポータルサイト【http://www.a-iju.jp/】からどうぞ。
Aターンサポートセンターの窓口でも登録可能です。

登録はコチラから▷▷▷

Aターン登録制度

秋田県内の企業に就職したい県外在住者と人材を獲得したい県内企業を結ぶ登録制度です。Web サイト「あきた就職ナビ」から登録できます。
Aターン就職をお考えの方はぜひご登録を！

Aターン就職マッチング支援サイト
あきた就職ナビ

登録はコチラから▷▷▷

〝秋田暮らし〞

はじめました。

【お問い合わせ】
秋田県 あきた未来創造部 移住・定住促進課 移住促進班
☎ 018-860-1234　FAX 018-860-3871

秋田県移住・定住総合ポータルサイト　秋田暮らし　はじめの一歩　検索

秋田県観光ガイド　あきたファン・ドッと・コム　検索

秋田県移住ガイドブック

"秋田暮らし"はじめの一歩

秋田県では、あなたの移住を全力でサポートするための移住ガイドブック『“秋田暮らし”はじめの一歩』を発行しています。移住に関する各種相談窓口やイベント情報のほか、支援制度、補助金のご紹介など“秋田暮らし”をはじめるための情報が盛りだくさん。このガイドブックを参考に、秋田への「移住」をイメージしてみませんか？

配布を希望される方は、秋田県市町村の移住対策担当窓口へ。